

緑生凡版

2012.01.01

第三十六号

平成二十四年の年頭にあって

新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、我が国をはじめ、世界中が災害と不況に苛まれた一年でした。今年は、明るく希望にあふれた年にしたいものですが、どんなものでしょうか。

このところの災害や不況を通じて、格差がまるで、インフルエンザの感染のように世界中に急速に広がっているのを感じています。それを許しているのが、政治の不毛です。しっかりと足下を見て欲しい。もう一度、何のための、誰のための政治であるかを考え直してもらいたいと思います。しかし、現実には、政局ばかりです。

なぜ、このようなことになってしまったのでしょうか。ただただ、あきれるばかりです。

震災復興においても、復興の遅れは、国がもたもたしているからと言うけれど、本来なら、地域で復興のあり方を考えて、自主的に再建を行っていくことが望ましい。それなのに、まだ国頼みになっている。この構図を直さなければ、地域格差は無くなるはずがない。規制緩和というのは、こういうことができるような規制緩和であるべきで、そのためには、国のあり方を抜本的に変えていく必要があるかもしれない。大阪市長の橋下さんが人気があるのは、こういった改革への期待があるからなのでしょう。

恭賀新年

旧年中は格別のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます
本年も倍旧のご愛顧の程お願い申し上げます

平成二十四年 元旦

使命ですから、今年は、すくなくとも賞与をだすことのできる経営をしていきたいと思っています。そのための今年のキーワードは、「コミュニケーション」。「ひとつになること」、「夢をあきらめない」です。

『今年こそと思い続けて三十余年
夢に向かって、一歩、一歩』

代表取締役
井上 康平

昨年の話題にも明るく、希望に満ちたものもありました。私の一押しは、なでしこジャパンのワールドカップ優勝です。なんといっても、普段であつたら勝てない相手に、結果的に勝ったという事実です。ドイツに対しても、決勝戦のアメリカに対しても、それまで一度も勝ったことが無いのに、勝つことができたのは奇跡的な出来事です。たしかに、最後まであきらめない、勝負にこだわる姿勢は見事でしたが、劣勢にあつてもパスを回しながらチャンスをつうサッカースタイルの中に、奇跡が潜んでいたと思います。パスサッカーは相互の意志を伝え合うコミュニケーションサッカーです。お互いの意志をうまく伝え合うことで、ひとつになって、大きなパワーを生み出すことができたのだと思います。キャプテン澤選手の「夢をあきらめない」という言葉が印象的でした。

さて、緑生研究所を振り返ってみると、世の中の例にたがわず苦しい経営を余儀なくされた一年でした。しかし、そういったなかでも、社員一同が、忙しく働くことができたと言うことは、むしろ、感謝すべきことであつたと考えています。とはいえ、経営者として、それでよいとは思ってはいません。社員が働いた分の給与と賞与がもらえるような会社の経営形態を整えることが

日本の未来・生物技術者の未来のために

新年あけまして

おめでとうございます。
本年もお引き立ての程、
よろしくお願い申しあげます。

昨年は三月に東日本大震災という未曾有の大災害がありました。被災された方々に謹んでお見舞い申しあげるとともに、一日も早い復興をお祈り申しあげます。

緑生研究所本社は東京都調布市に存在しています。震災当日は大きな揺れを感じましたが、幸い大した被害もなく済みしました。ただその後の計画停電の対象区域に入ってしまった、年度末に十分な対応がとれない場合もあったことをお詫び申しあげます。

さてこの調布市には、東京都神代植物公園が存在しており、昨年十月に開園五十周年を迎えました。四季を通じて訪れる人の多い植物公園ですが、春と秋のバラは有名であり、また江戸園芸植物の収集にも力を入れています。そして近年の生物多様性保全の流れを受け、東京都内の絶滅危惧植物の保全にも取り組み始めています。弊社でも現地調査や情報の収集などの委託を受け、そのお手伝いをしてきました。今年度には新たに、植物多様性センターという施設がオープンします。

現地調査や情報の収集のため、都内各地で地元の愛好団体・自然保護団体の方々のお話を伺う機会が多かったのですが、あちらこちらから聞こえてくるのは、若い人が入らないという声です。私自身がかつて活動していた鳥類関係の団体でも、会員減と高齢化、そして若人離れが深刻な問題となつていきます。

若い世代が面倒な人間関係を嫌って団体に入らないという傾向もあるのでしょうが、ここしばらく言われているような、「理系離れ」もその原因にあるのではないのでしょうか。特に生物を扱うような、地道で汗と泥がつきもののフィールドワークが伴う分野は、敬遠されているのではないかと感じられます。

ここ数年新卒の若い社員を採用していない弊社が声高に言えることではないかもしれませんが、若い世代に環境や生物に目を向かせて関心を高めさせていき、人材を育てていくのも我々生物技術者の任務ではないかと感じる次第です。生物技術者に未来があるのかと問われたら……その道筋をつけるのも我々の任務でしょう。その前に我々が仕事を続けて、食べていかねばなりません。

これからの日本を考えると、まず震災からの復興があり、そして経済の立て直しが早急な課題でしょう。すると環境だ生物だなんてことは、後回しになりかねません。環境の価値、生物の価値を数値化したり、経済的価値をはじき出したりというのは胡散臭くて好きではないというのが本音なのですが、経済重視の浮き世を渡っていくには、避けて通れないことなのでしょう。

そのためには、自然への感性と生物技術を一層研ぎ澄ますだけでなく、社会の動き・経済の動きに対する感性も磨かなければいけない。そう感じる次第です。

取締役

田中 利彦

平成二十四年 新年におきて

昨年、我が国は多くの災害に見舞われ、かつて経験したことのない凄まじい打撃を受けました。特に東日本大震災においては、いまだ被災地の復興や放射能に関する問題が山積みであり、解決に向けての道筋さえ見えない状況です。

その最中であつて、このような「新年の挨拶」について、非常におこがましいことと恐縮しています。ただ、このような時期だからこそ、「自分達にできることは何なのか」を日々の暮らしのなかで各人が常に頭の片隅に置いておくこと、それだけで我が国の復興に大きく貢献するということを忘れてはいけないと思います。そうすることで自分の身の丈にあった貢献（必ずしも直接的なお手伝いでなくともよいと思います）ができるはずですよ。被災地の皆様およびその関係者の方々におかれましては、厳しい状況が長く続き、そのご苦労は想像を絶するものと思います。それでも希望をもつて前を向けば、必ず道は開ける、そう信じています。

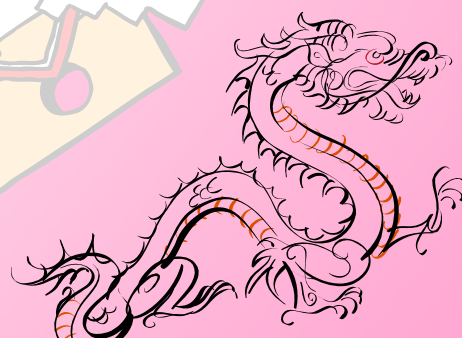
会社経営においては厳しい状況が続いています。発注額は年々下落し、今年も同様の状況に拍車がかかるものと思われまふ。おそらく、全体の仕入量が減少しているなかで各社の競争がこれを加速させているように思えます。我が社も社内の効率化、調整などでは足らず、社員の給与やお世話になっている外注さんの単価を下げることでなんとか凌いでいますが、それでも追いついていない状態がみられます。今年は更なる効率化が必要となりそうです。

しかしながら、こういった厳しい状況のなかでも夢をみたい、楽しみたい、そういった気持ちをもたなければ、よい仕事はできません。繰り返しになりますが、前向きに、楽しく充実した一年となるよう、努力したいと思います。

本年も何とぞ、
よろしくお願いいたします。

取締役

瀬川 隆司



コラム



「竜の落とし子」は、その姿が竜に通じることから、名付けられたようですが、あのコミカルな外見から竜に迫り着くことは、想像力の乏しい私にとっては至難の業です。乱獲などにより減少している種類もあるため、ワシントン条約などで保護されているものもあります。この可愛らしい竜たちが、これからの幻の生き物にならないことを切に願います。



編集後記

お読みいただき、ありがとうございます。
第三十七号は、暖かい春までもう一步の三月一日の発行を予定しています。

特集では、スタッフの所属や専門等を改めて紹介させていただきます。